

アジア・アフリカ文化研究所の創立三十周年に寄せて

東洋大学学長 神 作 光 一

日ごろから地道な活動を続け、その顕著な成果を公表して来ているアジア・アフリカ文化研究所の創立三十周年を、心からお慶び申し上げます。とりわけ、三十周年を記念して開催された「異文化間コミュニケーションの可能性」と題するシンポジウムと講演会は、まことに時宜にかなったすばらしい計画の実現であったと敬服しております。

新年を迎え、いよいよ九〇年代の幕明けとなりました。二十一世紀の息吹が感じられる新春でもあります。国際化と情報化とは、おそらく現在以上に進展し、かなり不透明な時代となるでありません。それだけに「異文化間コミュニケーションの可能性」を探ることは、きわめて肝要なことがらであると認識しております。

さて、大学付置の研究所のあり方について、普段から考えていることの二つを、ここで率直に述べておきたいと思えます。その第一は、研究所における「不易」と「流行」ということでもあります。申しあげるまでもなく、「不易流行」とは、芭蕉の著名な俳諧用語であります。元禄二年（一六八九）、当時四十六歳に達していた芭蕉は、『奥の細道』の旅行中に、この「不易流行」論の着想を得たらしいと考えられています。ご承知のごとく「不易」とは、変化せざるもの、つまり詩における基本的なものであって、永遠性を有するものを指していると思われまます。一方、「流行」とは、変化するもの、つまり詩における流転的なものであって、その時々の新風なるものを指していると判断されます。しかも、この「不易」と「流行」の二つは、共に「風雅の誠」から出るものであって、根本においては「一に帰す」べきものと受けとめられております。

もとより、芭蕉は俳諧の道のあり方について述べているのですが、考えてみますと、大学付置の研究所もまた、この芭蕉のいう「不易」と「流行」との両面を合わせ持った一つの有機的な組織体であると言えるでありましょう。すなわち、研究所における「不易」とは、いわば創設以来の基本的な精神であり、理念であって、それは時代を超えて貫かれ、継承され、堅持されていくべきものであると言えます。したがって、このような誇り高い基本的な特色は、今後変わることなく尊重されていくべきものであらうと思います。

一方、研究所における「流行」とは、時代の流れと要求ニーズにに応じて、たゆみなく進歩し、移り変っていくということになります。研究所の創立後、三十周年を迎えたこの機会に、今までの歩みを振り返り、謙虚な姿勢できびしいチェックをすることも必要でありましょう。たとえば、研究所としての各種の活動が、いわば定食メニュー化していかないかどうかということ、また、研究の進め方について、いわばチャンネルの切りかえの必要はないかどうかということ等々であります。このような意味での変化への真摯な対応は、そのまま研究所の活性化へとつながるものでありましょう。

来たるべき二十一世紀へ向けて「不易」なるものとして何を残し、「流行」なるものとして何を变えていくかということ、を再認識することが、研究所にとつての大切な使命であると考えられます。この際、研究所の皆様の叡智を結集することによって、研究所のあるべき姿を模索すべく、着実な努力をすることが大事だと思います。そうすることによって、この伝統に輝く研究所には、より豪華な大輪の花が開くに違いありません。

さて、その第二は、研究所の個性化、特色化ということについてであります。ところで、そもそも個性化とは、一体どういうことなのでありましょうか。元禄六年（一六九三）四月の末、江戸詰めであった彦根藩士森川許六が彦根へと帰国するの際して、芭蕉（当時五十歳）が書き与えた『許六離別の詞ことば』の中に「古人こじんの跡を求めず、古人の求めたることを求めよ」という著名な一節があります。平たく言えば、個性化とは「先人たちの求めた跡を単に模倣し追求するのではなく、先人たちの求めたものが何であったのかを考えながら追求する営みである」ということになるのでありましょう。そうすることによって、はじめて真の個性が出てくるのだと思います。

もちろん、このこともまた俳諧の道についての芭蕉の指摘ではありませんが、およそ個性化ということを考えてとき、かなり大きなヒントになり得るでありましょう。その意味で、含蓄のある言葉として噛みしめておきたいと思います。

以上、芭蕉の言葉をたまたま二つ引用しながら、研究所における活性化へのささやかな提言を私なりに申し述べた次第であります。創立三十周年を迎えた本学のアジア・アフリカ文化研究所の今後の益々のご発展と充実化とを念願しつつ、お祝いの言葉とさせていただきます。

(一九九〇・一・一八)